

突然の電話

「暇？」「受話器をさめてる間もなく、聞き慣れた声が響いた。「これから行つてもいい？」

出し抜けの言葉に戸惑つ　返事に困つた

深く考えずに発した曖昧な顔つき　曖昧さに突け込まれた。「じゃ、これから行くわ」

反対しようにも、一方的に電話が切れた。

困惑と共に苦笑が自然と浮かぶ　やれやれ、どうしたものかと、

取り敢えずは来客を迎える為に部屋の小片付けを　ドアチャイムが来訪者知らせる。

不意のチャイム、自然と視線が時計に向く、針が殆ど進んでいない　いくらなんでも早過ぎる

「やつほー！」ドアを開けると、明るい声とともに声の主が跳び込んで来る。「どこからかけたの」半ば采れた態度を装い、取り敢えず訊いてみる。

曖昧な返事を返しながら目の前の女性は、玄関口できよきよと辺りを見まわっていた。

身を乗り出し、家の奥を覗き込む。「下の公衆電話」人の顔を覗き込み、伺つたよつに応えた。「それよりもはいーおみやげ」左手に下げた「ソ」

に二袋を掲げる　中身は疑い様もなく、酒の摘みだった。

「だんなは？」袋を受け取り、取り敢えず礼を言つ。返ってくる返事で、玄関

の鍵を閉じるか判断しよう。

「・・・けんかしちゃった」それまでの陽気な態度が一変する。顔を俯け気味に低い声で答えた。

あつ　続ける言葉に困る。どうしたものか・・・「まあ、こじやな

んだし中に入って」

「ええ　」彼女が弱々しく頷き答える。

視線が重なり合つ、大してしよげているようには伺えない。肩に掛つた後ろ髪を揺らしながら勝手知つたる家の中に入つていく。

思わず漏れる溜息　彼女の後姿を見ながら玄関の鍵を閉じた。

「相変わらずね　この部屋は」断りもなく人の部屋に乗り込んだ彼女の「さう、それに・・・また本　増えたよつね」机の上に詰まれた書籍の

柱、到るところに山積みになされた本の山を見て、率直な感想を述べたのだろう。

「まあね　人の部屋の観察よりも、こつちにおいで」

「ふう〜ん」後ろ髪引かれる思いを切つて、戸間に引き返してソファに坐る。「コーヒー？」「しまらない」を尋ねているな、食器棚の引き戸を開けて「ソ」

ツチの瓶を取る。「それともこれにする？」

「分かりきつた質問だった　当然、後者が選ばれた。」

グラスを二つ　一つを彼女の前に置いた。

硝子卓の上に置かれたグラスを脇から眺め、急に萎れた彼女のグラスにスコッチを満たした。「それで……どうしたの」

最初の一口、彼女が蒸せる。

「水で割ろうか？」

首を振って断り、彼女は語り始めた。喧嘩の理由は、いつもの如く、他愛も無い切っ掛けが原因のようだった。

二人が始めて一緒に行ったレストランのメニューを、今日の夕食に作り、だんなが気付かなかった　他人にしてみればくだらない理由、しかしそのくだらない理由が喧嘩の発端らしい

思わず枯れた笑いが漏れる、だからどうしよう？

止め処も無くだんなへの愚痴が続く。

「……気は済んだか」彼女が突き出す空いたグラスを受取った。

「まだ！」　なんとも、まあ、見事なまでに付入る隙のない答え。

満たされたグラスを受取り、彼女は飲み込んだ。

「あ……そつ」これ以上なにを言っても無駄だ、彼女の気が済むまで話させよう。

不意に乾いた破裂音が外に響いた。

「……なんの音？」彼女の気がそれる。

「ベランダに出ればわかるよ」

返事を聞くなり、好奇心に打ち勝てず彼女が立ち上がった。

ベランダと隔てる窓を開けてあげる。暫くは夜空に打ち上がる無数の華たちが彼女の相手をしてくるだろう　その間に彼女の家に電話をかけよう。

「綺麗　」夜空に咲く花火に見惚れた彼女の咳きが聞こえる。

「よかつたね　　住んでいる方としては、毎晩だから迷惑だけだね」

彼女の横に並んで、東京湾の灯りに目を向ける。

遥か彼方に千葉港の灯りが浮かんでいた。

「……そんなものなのよね　　世の中って」出し抜けに、悟り切ったように彼女が答えた。

いつしか花火は終わり、道に連なる車の絶え間ない光りの流れを見下ろす。

「いつもの事だと、ありがたみもなくなるのよね」彼女が寂しげな咳きをもたらした。

彼女のことを黙ったまま見据える　　寂しげな表情が溜息を堪えていた。

「毎日、あの人と顔を合わしていると……」

「でも、それを覚悟して一緒になったんだろう　　我慢しなきゃ」

彼女が素直に頷き答えていた。

「はい」 「彼女の前に電話の受話器を差し出す。

「これは？」戸惑い半分で、彼女は電話を受け取った。

「だんな」

「えっ？」彼女の表情が紅くなっていく。

「迎えに来てもらいな」 「後ろ手に捻捻しながら、彼女をヘラランダ

に残し、先に家の中に戻る。